



2010/11/22

TWS hongo

## 第6回展覧会企画公募

Emerging Artist Support Program 2011

2012/1/14 日 - 2/26 日 トーキョーワンダーサイト本郷

### 選出企画

1F 企画者：廣田大樹 | Hiroki Hirota | 企画名：HARU by Hija Bastarda

2F 企画者：実験音楽とシアターのためのアンサンブル | Ensemble for Experimental Music and Theater | 企画名："sapporo" around the world

特別賞企画者：チームやめよう | TEAM YAMEYO | 企画名：それでもつくるのか | So you're still going to make it?

3F 企画者：足利 広 | Hiroshi Ashikaga | 企画名：Future days



ルイス・カルネイロ「扇動者」2008, パフォーマンス風景, Caldas da Rainha, Portugal



足利 広 (vision for kalpa) 2011, HD 映像(2分)



チームやめよう (「お金」やめよう) 2011  
「第14回岡本太郎現代芸術賞」展示風景, 川崎市岡本太郎美術館, 神奈川



実験音楽とシアターのためのアンサンブル ジョン・ケージ(ヴァリエーションズ) パフォーマンス  
風景, 2009, 旧四谷第三小学校体育館 ©Yotsuya Art Studium



## 企画概要

展覧会の企画を志し活動している若手への支援・育成を目的とし、展覧会企画そのものを公募するプログラム「展覧会企画公募」。選出された企画はTWSが支援し、TWS本郷にて展覧会を実施する機会を得ます。

2011年、私たちは大きな転換期を迎え、文化芸術やアートの担い手としてのミッション、展覧会を開催する意味…これまで当然とされ省みることの無かった、あらゆる事象を根本から再考する局面に立っています。また、芸術作品をモノとしてではなく、活動そのものやプロセスをアートとして提示し、リアリティを追求する動きも顕著に見受けられます。第6回目を迎える2011年度は、《いま、本当に必要とされている「場」や「実験」とは何か?》《公共の場で行う「展覧会」とはどうあるべきなのか?》を改めて問いかけました。

新しい表現の可能性のみならず、展覧会という表現の場をおとしていかに社会へコミットし、新たな協働の地平を開拓していけるか。TWSは、これまでの「展覧会」という枠組みを再考し、積極的に展覧会とはどのような場であるかをともに考え、ともに試行していく企画を募集しました。今年は3企画に加え、1企画を特別賞として選出いたしました。

## 開催概要

- 会期 2012年1月14日(土)～2月26日(日)
- 会場 トーキョーワンダーサイト本郷
- 開館時間 11:00～19:00(最終入場は30分前まで)
- 休館日 月曜日(祝日の場合は翌火曜日)
- 入場料 無料
- オープニング・レセプション 2011年1月14日(土) 17:00～19:00
- 主催 公益財団法人東京都歴史文化財団 トーキョーワンダーサイト

## 会場案内

トーキョーワンダーサイト本郷

〒113-0033 東京都文京区本郷2-4-16

TEL: 03-5689-5331

FAX: 03-5689-7501

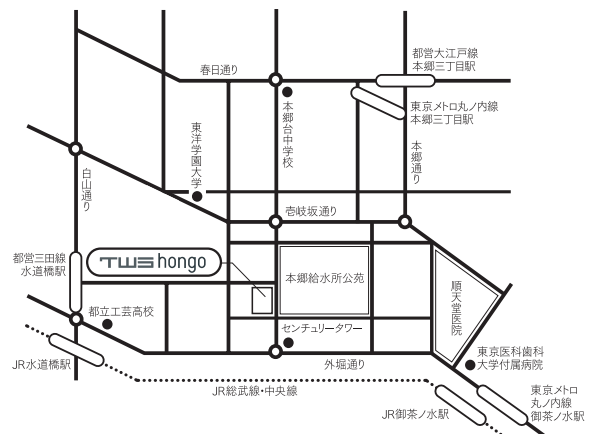
■交通案内: 御茶ノ水駅・水道橋駅(JR総武線)、

水道橋駅(都営地下鉄三田線)、

御茶ノ水駅・本郷三丁目駅(東京メトロ丸ノ内線)、

本郷三丁目駅(都営地下鉄大江戸線)各駅より徒歩7分

駐車場はございませんので、お車でのご来館はご遠慮下さい。





## 2011年度審査員講評

今年は震災という未曾有の出来事があった上に、展覧会の形式そのものを問題化するという課題を出したこともあり、どの程度の応募があるのかを危惧していたのだが、結果的に審査員が期待していた企画が選出されたと思う。

今 アートには、「世界観」が求められている。ただ単に新しいとか、美しいとか、面白いとかいっただけでは不十分だ。なぜ今、この時期に、この場所で、この表現を行わなければならないのか。最終的には、この問いに対する切実さが選考を決めた。今回選ばれた3組の展示は、いずれも時間と空間のどちらにおいても小さなギャラリー空間に収まりきれないスケール感を共有している。それが展示としてどのように結実するのか、今からとても楽しみだ。

毛利嘉孝（社会学者、東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科准教授）

展覧会はメディアだ。

単なる空間や、作品を発表する場、というだけではなくて。「展覧会」という機会をそれを使って発信すること、問いかけること、考えること、いろいろなことが出来ます。その可能性をもっと探ってほしいと思いました。自身の作品を見てほしい、と提案するアーティストの応募が多数でしたが、展覧会は特定のテーマの探求により、複数のアーティストや作品の出会い、いま、ここだから交わせる対話を紡いでいくダイナミズムを持ち得ることもできます。震災による喪失とその後の危機を経験している今だから、展覧会という社会的なプラットフォームにおいて、表現者のより積極的な参与を実践することがますます出来るのではないのでしょうか。

神谷幸江（広島市現代美術館学芸担当課長）

企画公募であるにもかかわらず、全体に企画そのものに対する意識が低かったことが気になった。つまりキュレーションとしてよく練られたもの、野心的なもの があまり見当たらなかったように思う。しかし傍らで、現実に対応しようとする作家のヴィジョンと強い意志が垣間見えたことは幸運だった。現時点ではまだ、意識の高い作家どうしのゆるい繋がりが展示という体裁をとっているに過ぎない企画がほとんどであるが、本展示までには明確なキュレーションがなされることを期待している。

黒瀬陽平（美術家、美術評論家、カオス\*ラウンジ代表）

今回は、新たな審査員となり、311を受けてアートとは何か?公共の場とは何かという問いが、ゼミ含めて課題となった。一次審査を通過したものは、今までになく企画意図が良く検討されていた。全体にヴィジュアル的にひきつけられるというモノよりも、今考えている事、考え直したい事、向き合いたい事を、はっきりとした回答がまだなくも、それへの取り組みが強く感じられた。

特に最終選考された3案は、震災後新たに気付いた時間がテーマとされている。足利広の案は、ピンホールカメラによって松島の太陽を仏教の「コウ」という長い時間の感覚を表現しようとしている。また、廣田大樹の案は場所を占拠する時間 とそこから生まれるコミュニティへの実験であり、実験音楽とシアターのためのアンサンブルの案は、「sapporo」という一つの楽曲を、24時間、展示期間中継続して行う試みである。この3案から生まれ、感じる時間が、訪れた人々が今向かい合う各々のリアリティに働きかけていく事を期待したい。

家村佳代子（TWSプログラム・ディレクター）

## 廣田大樹 | Hiroki Hirota | HARU by Hija Bastarda



ギ・カストール(鏡の向こうに) 2011、フィルムスチル

## 企画概要

今回のプロジェクトは、僕たち一人一人のポテンシャルを現実的なムーブメントとして還元し、活動的になることを目的としています。そのために、各アーティストがそれぞれ独自のプロジェクトを行いながら、自らの権利を自らで管理する一つのコミュニティを作り上げて行きます。自主管理を通して運営される共同体では、自発的に生まれるプロジェクトを媒体として人と人との連関と経験が培われていきます。そのコミュニティのなかでは、鑑賞者は参加者として、もしくはVoyeur(積極的な監視者)として歓迎されることとなります。人と人との関係性を創造し、出会いと共同生活を可能化させ、時間と場所の感覚を探索すること。これこそが、今回の展覧会での我々の意図する目標です。

## 企画者プロフィール

1984年広島県生まれ。

上智大学卒業後、オークション会社に就職。その後、バルセロナ自治大学のマスターコースで現代美術理論を学ぶ。2011年、マスターコースの有志でアーティストグループ "Hija Bastarda" を結成、現在は市民運動とアートの関わりをテーマとしている。今回の展覧会のために、廣田大樹(日本、広島)、ルイス・カルネイロ(ポルトガル、ブラガ)、ギ・カストール(ブラジル、エスピリトゥ・サント)、トマス・オピニオン(ポルトガル、カルダス・ダ・レイニャ)の4人によるグループを結成。

## 実験音楽とシアターのためのアンサンブル | Ensemble for Experimental Music and Theater | "sapporo" around the world



## 企画概要

震災はそれまで大丈夫だとされていたものの弱さを明らかにしました。これはそれぞれの場が持つ固有の機能の崩壊をも意味しています。いま大切なことは失われた機能をただ元通りにしこれまでの機能を再強化することではなく、その妥当性について再考することではないでしょうか。

例えば、展覧会の最大の機能は「作品をみせること」であり、ほとんどの作品は空間に収まり、既に完結しています。しかし、別の機能を優先すれば作品の全体像を把握する必要はなく、作品自体を展示しないこともありうるでしょう。一つの機能の裏にはみえない潜在的な可能性が常にあるのです。

本展では、会場の内外で"sapporo"を会期中演奏し続けるという同時多発的なイベントを起こすことで、展覧会の機能の拡張を試みます。一つの行為が演奏でもあり生活でもあるような多層性をつくりだすことは、場の可能性を考える思考モデルになるのではないかと考えています。

## 企画者プロフィール

ジョン・ケージの提起した「シアター」をもとに、フルクサス、スクラッチ・オーケストラ、ミニマル・ミュージックからヴァンデルヴァイザー楽派以降の流れに至るコンセプチュアリズムとミニマリズムの系譜の検証と再創造をおこなっている。メンバーは足立智美ワークショップ生(四谷アート・ステジウム)が中心。専門は音楽、パフォーマンス、美術、詩、など多岐にわたる。2011年7月に第1回自主公演(パフォーマンスギャラリー&カフェ 絵空箱、東京)を行う。

企画者ウェブサイト | <http://eemt.net/>

アダム・オーヴァートン 〈言い換え小品〉パフォーマンス風景、2011、パフォーマンスギャラリー&amp;カフェ 絵空箱、東京 ©yoko kikutani

## 足利 広 | Hiroshi Ashikaga | Future days



個展「空白と社」展示風景、2011、瑞聖寺アートプロジェクト、東京

## 企画概要

我々はもはやただ経済が発展し、あらゆる面で技術が高度に革新するだけの未来を思い描いてはいけない。我々は経済や技術が高度に発展しながらも、より川の水が美しく空気が澄んでいる未来のビジョンを思い描かなくてはならない。我々は、自分の時間をただせわしく生きるだけではなく、自分の時間を必死に生きながらも、木々や地球やあるいは人類全体の寿命といった大きな時間の流れを時折感じる豊かさを思い出さなければならない。「もし、人間の寿命が何千、何万年と長かったら、我々はどうのように時間を感じ、どのように世界を見ることができるだろうか?」そんなことを考えながらピンホールカメラで映像制作を始めた私は、黎明の松島と放射能により規制されてしまった新田川の水流を撮影することにした。それは、遠い昔から現在を通り過ぎ遥か未来へと流れる時間の中で、決して失われる事のない希望の光をフィルムに焼きつけるという行為だったように思う。展覧会「Future days」では、松島の夜明けを撮影した映像作品《rising》と南相馬市に流れる新田川を撮影した映像作品《life stream》を展示します。両作品とも「劫」という仏教的な時間表現を手本に、日々忙しく流れる時の中で、未来へゆったりと続く時間を知覚してもらおうとする作品です。

企画者ウェブサイト | <http://hiroshiashikaga.cocolog-nifty.com/blog/>

## 企画者プロフィール

1980年広島県生まれ。千葉大学および School of Art Institute Chicago で映像制作を学んだ後、国内外での個展、グループ展、芸術祭参加を主な活動とする。2009年からピンホールカメラで撮影した映像制作をはじめ、2011年に「vision for kalpa」が Franck Muller Art Grand Prix 審査員賞を受賞する。

## チームやめよう | TEAM YAMEYO | それでもつくるのか | So you're still going to make it?



《「違法駐車」やめよう》2009  
「ゲンビどこでも企画公募2009」インスタレーション風景  
広島市現代美術館、広島 Photo: 元圭一(CACTUS)

## 企画者プロフィール

社会や人間関係が成熟する共に、誰もがやめた方がよいと思ってもやめられない事が増えてくるチームやめようは、こうした事が社会を蝕む元凶になっている事に着目し「やめたくてもやめられない」をテーマに活動するチームである。展覧会は2009年、「ゲンビどこでも企画公募2009」(広島市現代美術館)、2011年には「第14回岡本太郎現代芸術賞」(川崎市岡本太郎美術館)等がある。